

ボールハチット著

西部インドにおける統治政策と

社会的変化（一八一七—一八三〇年）

深 澤 宏

英領支配がインドの社会と経済に対してどのような衝撃を与え、それをどう変化させたかという問題は、インド近世史研究における最も重要な研究課題の一つである。然しそれは、一挙に解決され、一義的な解答を与えられ得る程容易な課題ではない。何故ならば、インドの側の事態もその上に君臨した英領支配の統治政策も行政技術も、地域と時期とに応じて、多くの点で異なっていたからである。それ故英領支配がもたらしたインド社会の変化を全体として明らかにするために、先ず、地域と時期と課題とを限定した特殊研究を集積する以外に方法はないように思われる。事実特定地域の、しかも英領初期の経済的社会的変化を、何らかの仕方、で、実証的に究明しようとするのが、戦後のインド近世史研究における一つの顕著な動向であると言い得る。

かかる動向の一環として、西部インドにおける社会的経済的變動についても最近幾つかの研究が発表された。一つは、英領支配が誘起した経済的変化を多面的に分析した、ブーナーの D・R・チ

ョークセー教授の一連の著作である。二つは、初期の英領支配が在地の支配階層、社会構造、及び社会諸制度に及ぼした社会的変化を跡づけたボールハチット氏の研究である。以下に、この書物の内容を簡単に紹介し、その後で若干の感想を記したい。

二

著者 R・ボールハチット氏は、ロンドン大学オリエント・アフリカ学院でインド近世史を講じて居り、本書に先立つて、小論文《The Home Government and Bentinck's Educational Policy, in Cambridge Historical Journal, vol. X, No. 2, 1951》を発表した。本書は多数の英文記録に基いた研究で、著者がロンドン大学に提出した学位論文を加筆訂正したものである。本書は次の三十一章からなる。

Preface

pp. v-vii

Part One

I. Introduction

pp. 1~6

II. The New Rulers take Charge

pp. 7~29

III. The Ideas behind the New System

pp. 30~42

IV. The Fate of the Old Rulers

pp. 43~76

V. The Servants of the Old Government

and of the New

pp. 77~103

VI. The Deccan System

pp. 104~134

Part Two

VII. Elphinstone, the

Governor of Bombay

pp. 135~139

VIII. The Old Bombay Territories

pp. 140~185

IX. The Deccan System and the

Government of Bombay

pp. 186~247

X. Education and Religion

pp. 248~291

Part Three

XI. Epilogue: The Fate of Elphinstone's

Policies under Malcom

pp. 292~319

Appendices

Glossary

Index

周知の如く、第三次マラーター戦争は、一八一七年一月五日に始まり、翌年六月三日宰相バージョ・ラーオ二世の対英降服によつて終結した。開戦直後、東インド会社政府は、戦争終結と同時に宰相を廢職して、その領域を英領に併合することに決定し、併合されるべき新領域をデッカン・コミッションとして臨時の行政区域とし、そのコミッショナーとして、宰相政府駐在官マウントスチュアート・エルフィンストン（一七七九—一八五九年）を任命した。次いで一八一九年一月、会社政府は、エルフィンストンをボンベイ管区知事に選出し、同時にデッカン・コミッショナーとしてウイリアム・チャプリンを任命し、デッカン・コミッションをボンベイ管区に編入して、管区政府の一般的監督の下に置いた。一八二七年エルフィンストンはボンベイ管区知事を辭職して

帰国し、後任として彼の親友ジョン・モールコームが任命され、一八三〇年まで在職した。

本書の第一部は、デッカン・コミッショナーとしてのエルフィンストンが、デッカン地域において戦後の事態を処理し、イギリスの支配権を樹立するために実施した諸政策と、それが生み出した社会的変化、第二部は、ボンベイ管区知事としてのエルフィンストンが、同管区の旧来の領域（グジャラート及びコンカン）とデッカンとにおいて施行した諸政策とそこに生じた社会的変化、第三部は、モールコームの諸政策を取り扱う。

著者によれば、エルフィンストンには二つの相反する統治理念があつた。即ち、一方で彼は、既存の慣行と貴族層の特権とを共に無視して、イギリス式司法制度と複雑な法規とを設定し、法による支配を全面的に樹立したベンガル方式に反対し、むしろ、在地の法慣行をより一層尊重したマドラス方式に賛成した。然し彼は、マドラス方式についても、それが既存の貴族層を無視乃至排除する傾向を有したことに反対し、デッカンでは、出来る限り、既存の支配層の特権と社会秩序と法慣行とを尊重し存続させ、そしてかかる一般的原则の範囲内で、法規の制定を最少限度にとどめて、英人地方官の自由裁量を大幅に承認する方針であつた。然し他方で彼は、当時イギリスを風靡した功利主義・改革主義の影響をも受けていた。それ故伝統の保存と改革という二つの理念が、彼の中で屢々拮抗した。

以上の「序文」の後、第一部第一章は、エルフィンストンの略

歴と性格を素描し、彼が貴族と伝統に対して、深い共感を持つていたことを指摘する。第二章は、第三次マラーター戦争において、会社の占領地域の拡大に伴い、各地に英人徴税官が任命され、各徴税区の徴税と司法の責任を負わされたこと、その際彼らは徴税については請負制を廃止して、直接に村長を通して徴収すべきである反面、その他の社会慣行及び司法制度については既存のそれを尊重し継続するよう命ぜられたこと、及び支配層を保護する原則と統治上の必要とから、マラーター王朝の末裔のためにサーターラー藩王国が設立されたことを述べる。第三章は、先述せる二つの統治理念を詳論した後、エルフィンストンの実際の政策決定に際しては、この二つの理念の他に「統治上の必要」という考慮も大きく作用したことを論ずる。以上の一、二、三章が第一部のいわば序論で、次の四、五、六章がその本論である。

第四章は、宰相とその一族の追放を述べた後、宰相に仕えた封臣達に対する政策を詳述する。彼らに対するエルフィンストンの方針は、マラーター戦争において彼らが会社の勢力に抵抗した度合に依じて、その所領を削減した上で、彼らを存続させ、併せて、旧政府の失業官吏・軍人のために就職の機会を造出するということであつた。従つて彼らは、削減された所領の自治を認められた反面、一定数の兵馬を保持する義務を課せられた。第五章は、膨大な数の、旧政府の官吏・軍人・兵士に対して、先ず、帰農が奨励され、次いで、帰農し得ず、しかも放置すると危険な者に限つて、新政府に優先採用する方針がとられたこと、地元出身の官吏

とマドラス出身の官吏とが同一職責に任命され、相互に牽制せしめられたこと、及び、旧政府の保護を受けた聖職者達は新政府によつても保護されたことを述べる。第六章は、新政府の司法・徴税・治安政策とそれが造出した社会的変化を論ずる。第一に司法に関しては、既存の司法集會制度を存続させる方針がとられたが、しかし、これに関する若干の規則が制定され、更に集會監督官も任命された。また従来明確であつたインド人地方官及び村長の行刑権限も画定された。第二に徴税については、村役人の中飽を抑止するため、各自の納入額を記した証書が個別農民に対して与えられ、村費が削減され、そして従来村長に委ねられていた荒地処分権も政府の手中に収められた。また郷主と郷書記は、従来の役得収入を継続された反面、徴税参与を拒否された。第三に治安については、盗族を村番人とする慣行が継続され、そして村番人の役得と義務も画定された。

第二部第七章は、ボンベイ管区知事としてのエルフィンストンの日常生活を素描する。次いで第八章は、ボンベイ管区の旧領域におけるエルフィンストンの政策を取り扱う。旧領域では、彼の前任者が導入した徴税制度及びイギリス式司法制度によつて、既に多様な社会的変化が生じ、特に在地支配層の社会的地位が著しく低下していた。これに対してエルフィンストンは旧領主層の特権を復活させ、彼らをデッカンの旧封臣の地位にまで引き上げた他は、一般に、既に生じた変化をそのまま承認し、固定する方針をとつた。第九章は、第六章の「デカン体制」を再びとり上げ、これに対

して更に次の如き変化が加えられたことを述べる。(一)司法集会制度の不規則性を是正するために、多くの規則が制定され、それが裁定し得る係争の規模も規定され、また集会登記官や補助裁判官も任命された。(二)本社重役会や管区改革派の要求に応じて、デッカンにも正規の英人裁判官が任命され、イギリス式司法制度が導入された。(三)新司法制度の平等化的傾向から旧封臣層を保護するために、彼らに適用されるべき別個の司法規定も定められた。

(四)一八二六年六月デッカン・コミッションが廃止され、ボンベイ管区の通常の一地域とされた際、エルフィンストンは、既に多様の変更を加えられた「デッカン体制」をなおも保存するために、種々の法規を更に制定せねばならなかつた。かくして、彼の基本原則にもかかわらず、デッカンにも法による支配が徐々に導入されていった。第十章は、英語によるイギリス式教育の導入と普及を主張する本社重役会及び管区改革派に反対し、エルフィンストンは、土着語による一般教育を支持し奨励したこと、及び魔術師殺害の慣習を禁止したが、寡婦殉死の慣行に対しては消極的抑制策をとるにとどめたことを述べる。

第三部第十一章「結語」は、モールコームの基本方針は、エルフィンストンの諸政策を踏襲することであつたことを述べ、その線にそうて、彼は裁判官職その他の要職にインド人を初めて任命して、在地指導層の官職就任の機会を増加し、また改革派の平等化要求から旧封臣層の特権を守るため、それについて種々の法規を制定した反面、改革派の主張に適合して、寡婦の殉死を禁止し

たことを述べる。

三

本書は必ずしも理解し易い本ではない。第一に、著者は、彼自身の解釈や説明を屢々省略し、代りに長文の史料をそのまま掲載して、読者をして判断せしめるとの方法をとっている。それ故、個々の政策がどのような事情や理由で決定されたのか、またそれがどのような社会的変化を造出したと著者は考えるのか、不明瞭な場合も多い。つまり著者自身のことばが少な過ぎるのであり、このことは、本書に結論らしい結論が存在しないことにも関係する。第二に、本社重役会、管区知事、デッカン・コミッションナー、徴税官、裁判官、下級官吏などの指揮関係と分限、司法集会とイギリス式司法機関との関係など、本書を理解するための基礎となる制度や概念が必ずしも明瞭に説明されていない。第三に、本書の各章には、節区分が存在しないことも、本書を難解にしている。要するに、本書は、読者をしてより良く理解させようとする配慮に乏しく、また素材の整理と消化も十分ではないように見える。

それにもかかわらず、本書は、既存の支配層と伝統的秩序を保護し存続させ、政權の交替に伴う社会的變動を最少限度にとどめようとしたエルフィンストンの基本方針にもかかわらず、統治上の必要と改革主義の影響とによつて、人的伝統的支配の代りに法による支配が樹立され、それに応じて旧支配層の社会的地位が低下し、そして伝統的な慣行と秩序も崩されて行つた過程を如実に物語っている。かかる事態を初めて多面的に提示した研究として、

本書の先駆的価値は甚だ大きい。史料の直接的引用が多過ぎることも、反面から見ると、本書の記述をより具象的にさせ、その上本書の資料的価値を高めているとも云い得る。本書が示唆する今後の研究課題の一つは、かかる社会的變動を、それを受けたインド人自身の情意と対応の動きに即して、インド人の側から再検討することであろう。

(Ballhatchet, Kenneth: *Social Policy and Social Change in Western India 1817-1830*, Oxford University Press, 1957, pp. vii+335, London Oriental Series Vol. 5)

イナン 著

歴史上の、及び現在のシャマニズム

——資料と研究——

護 雅 夫

本書の著者アブデュルカデイル・イナン（前名、フェトフルカデイル・スレイマン Fetukadir Süleyman）は、イスタンブール大学のゼキ・ヴェリディ・トガン（Zeki Velidi Togan）教授と同じくバシユキル・タタルの出身で、齢はすでに七〇才を越えていると思われるが、今日なお、トルコ歴史協会員、トルコ

言語協会主任専門研究員として学界の第一線にあり、数多くの業績をつぎつぎに発表している、チュルク史、民族、民俗学者である。

まづ本書の章名を示すと以下の如くである。第一章、歴史的に見たシャマニズム（一一二頁）、第二章、世界開闢及び人類創生に関する説話（一二二頁）、第三章、洪水説話（一二三頁）、第四章、世界の終末（二四二五頁）、第五章、神々と諸靈（二六四一頁）、第六章、シャマニズムにおける偶像（四二四七頁）、第七章、土地―水神（四八六五頁）、第八章、火とかまど（六六一七二頁）、第九章、シャマン・カムとその生活（七二九〇頁）、第一〇章、シャマンの衣服、かぶりもの、太鼓（九一九六頁）、第十一章、儀式と祭り（九七一一九頁）、第十二章、シャマンの祈禱詞、讃詩、呪文（二〇一五〇頁）、第十三章、占い、予言（一五一一五九頁）、第十四章、ヤダ（ジャダ、ヤト）石と兩乞いの呪術（一六〇一六五頁）、第十五章、結婚、出産（一六六一七五頁）、第十六章、死、葬送儀礼（二七六一二〇〇頁）、第十七章、ブルハニズム（Buranism, シャマニズム改革運動）（二〇一一二〇三頁）、第十八章、ムスルマン・チュルク諸族におけるシャマニズムの遺制（二〇四二〇七頁）。そして、このあとに、文献目録（二〇九一二四頁）、索引（人名、民族・部族名、地名、神靈名、術語、二二五一二九頁）と、図版七葉とが附録としてつけられている。

つぎに、各章の内容を簡単に紹介しておく。まづ第一章では、